

第五章 架け橋

相手を信じる心

派遣内定者となった夏は、つくば市にある研修センターで全国の仲間とともに研修を受けた。同じ千葉県の校長（八千代）、教頭（松戸）、教諭4人（銚子、船橋、市川、香取）計6人との交流を深められた。当時は、「即派遣」よりも1年後に派遣される人数のほうが圧倒的に多かった。頭と心の準備をして臨むことになり、大変ありがたい制度であった。

このときの校長先生は、ロッテルダムに派遣され、帰国して定年退職後に海外子女教育振興財団の教育相談員をされた。全国海外子女教育国際理解教育研究協議会（以下、全海研）の事務局でお手伝いしていた私が推薦したことがきっかけである。その校長先生の後任が、同期派遣の教頭先生になった。私のことを大変評価してくれて、折に触れて活躍の場を提供していただいた。人とのつながり。相手を信じる心は、伝わる（連鎖する）のだと思う。

11月の終わり。たしかその頃だった。校長先生に呼ばれて校長室に入った。「たかおに決まったよ。おめでとう！」校長先生の言葉が頭の上を通り過ぎた。「たかお？たかお？中央線沿線の高尾？」カタカナ表記の都市名を想像していた頭には「？」が溢れていた。「台湾だよ松井さん。台湾南部の都市の高雄。」社会科の教師でありながら、高雄という都市はすぐ浮かばなかった。「なんだ、台湾か・・・。」正直、落ち込んでいた。もっと遠く、普段行けないところを期待していたからだ。「おめでとう、よかったね。近いし安全だし・・・。」校長先生は、落ち込む私の表情を見て、なおさら「よかったじゃないか」を強調してくれた。今思えば、これが本当の優しさなのだと思う。校長先生は、私のために「良かった」と断言してくれた。しかし、未熟な私は「良かった」とは思えず、残念な気持ちのまま帰宅した。

この中途半端な気持ちを変えてくれたのは、高雄に派遣される同期の仲間と当時高雄で受け入れ準備をしてくれていた先輩方だった。同期派遣は教頭（埼玉）、教諭5（神奈川、新潟、千葉、山形、埼玉）の合計6人だった。1月に代々木のオリンピックセンターで1週間の研修会があり、即派遣のメンバーも含めて赴任地別のグループで研修を受けた。4月からの仲間と出会い、いよいよだという気持ちになった。また、現地から送られた「学校紹介ビデオ」には、派遣教師が作ったという第2校歌「高雄の歌」が収められていて、その伸びやかな歌声を聞いて希望が膨らんだことを覚えている。海外への引っ越し作業では妻に大変迷惑をかけた。（これは、帰国の時も同じだった。）

平成10年度、高雄日本人学校（台湾）が新しい勤務校となった。

4月、高雄に到着し、新しい生活が始まった。キラキラ太陽とヤシの並木・・・まさに「高雄の歌」の通りだった。着任して直ぐ、業務が始まる。仲間の存在がありがたく思えた。

連日、帰宅したら高雄の町を自転車で巡っていた。気持ちはずっとハイな状態だった。慣れていないことへの不安を抱えていた私に、ある保護者が温かい言葉をかけてくれた。「私たちは、先生方の異動・交代には慣れていきますから大丈夫です。先生方は、新しい日本を持ってきてくれるので期待しています。」意外な視点だった。「新しい日本を持ってくる・・・。」相手を信じる心ゆえの温かい言葉に救われていた。

仕事の遠近法

高雄日本人学校の中学部は、各学年1クラス、スタッフ5人で運営した。社会科担当の私は、中1・中2・中3の3学年に加え、6年生の社会科、中学部男子体育を受け持ち、総合的な学習の時間の担当となる研究担当を任された。定期テストは自作で、年間5回×3学年＝15回も作った。日本にいたころは、簡単に言えば「学級担任」「生徒会」「サッカー部」この3つの顔だけしか持っていなかったような私が、圧倒的な業務量でもやり切れたのは、生徒数の少なさ、スタッフのチームワーク、台湾という風土のおかげだったと思う。もちろん、教育委員会がないこと、出張や研修がないことも時間を生み出せたことにつながっている。時間をどう使うのか・・・自分自身の仕事のやり方、スキルが磨かれた時期でもある。「仕事の遠近法」という手法は、ここ台湾で身についたスキルである。いつの間にか自分自身の仕事の進め方のスタンダードになり、今も取り組んでいる。

ここで「仕事の遠近法」について、少し解説したい。

1. A4用紙に「Things to do 〇月」と書き、左端に1～20までの数字をふる。
2. 自分がやるべき業務を列記していく。
3. 書き上げたら、なるべく遠い仕事から手をつけて、できるものは完成させる。
(完成まで至らないものについては、できるところまでやる。)
4. 業務を進めていくうちに、どんどん終わり、見通しが立ってくる。
5. 最も手前の業務をやり終えると、それまでの取り組みにより見通しが立つ。
このことが、より良い実践につながる。
6. 全てをやり終えると、目の前1～2か月の業務がすっきりとなくなり、新しいことにチャレンジする時間と気持ちのゆとりが生まれる。

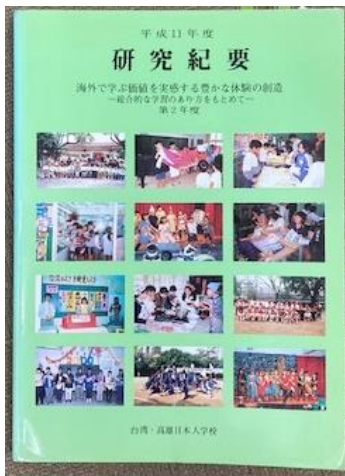
私が見てきた職場では、教員の仕事は常に忙しく、まさに自転車操業というのに相応しい現場ばかりだった。特に子育てをされている方々は、お迎え時間というどうしようもない縛りがありつつ奮闘されていたので、「忙しさ」は相当だったが、その分やることが明確だった。20代を独身で過ごした自分にとっては、その方々に比べたら自由度が大きかった。やりたければ何時までもできる環境があった。逆に言えば、業務の精選をしてこなかった。

在外教育施設では、業務の精選について考えさせられることが多かった。膨大な業務に加えて、初めての台湾で「総合的な学習の時間」の担当者になることで「台湾を知る・地域を知る」ということが求められ、そのための時間を確保する必要があったからだ。それでもテスト作りが終わらずに徹夜したことが何度かあった。やりがいのある仕事を頑張ることは全く「苦勞」ではなく、むしろ「喜び」と感じて取り組んでいたように記憶している。「仕事の遠近法」は、そんな生活を経て、私のスタンダードになっていった。

高雄日本人学校での3年間、自分で言うのも何だが、10年分の仕事をしたのではないかと思うくらい充実していた。帰国後、この3年間のまとめともいえる本を出版した。「フォルモサの祈り～台湾 高雄日本人学校の贈り物～」である。これについては、第6章で書かせていただく。

台湾のよさを発見しよう

中学部の総合的な学習の時間の推進役を任されたことで、これまで全くと言ってよいほど縁遠かった「研究」という分野に関わることになった。初めて過ごす台湾の日々を自分自身が理解を深めつつ、生徒たちの学びにつなげていく取組は、刺激的であり、本当に楽しかった。自分が主体的に学んでいたことで、生徒にも良い影響を与えられたのだと思っている。年度末にまとめた「平成11年度 研究紀要」は、全296頁にもなる大作だが、その中の「中学部の研究計画 実践記録 まとめ」136頁～285頁のほとんど、つまり150頁分を私が担当した。子どもがのめり込むように、自分も「研究」に没頭する日々だった。



研究は、中学部5名が全員で協議しながら進めていった。

研究の中心は、総合的な学習の時間（高雄タイム＝TT）を生徒の実態に合わせて進めていくこと。

1年目は、前任者の計画を踏襲し、台湾の地理・歴史・生活文化などをバランスよく学ぶような授業を展開した。

大きな成果を感じたのは、「台湾のよさを発見しよう」というテーマで臨んだ赴任して2年目の実践だった。自分自身の台湾理解・現地理解が進んでいくと、逆に、高雄日本人学校の児童生徒のほとんどが日本人社会の閉ざされた環境で生活していて、なかなか現地社会に溶け込んでいない様子が見えてきていた。

台湾につながる児童生徒（両親のどちらか、あるいは双方が台湾人など）は、台湾語に加えて中国語の会話もできて、現地社会にも溶け込んでいた。しかし、マイノリティであることには変わりはない。話を聞くと、彼らは日本にいるときもマイノリティであり、複雑な思いを抱えている様子だった。彼らが将来、堂々と胸を張って生きていけるような学び、自己肯定感の高まる学びが必要だった。

そこで、「台湾のよさを発見しよう！」というテーマを設定し、「巨大な人、八田與一」を取り上げることにした。八田與一は、戦前・戦中に活躍した土木技師。高さ約70m・長さ約1.3kmの堰堤を築き、山からの水をせき止めて珊瑚のような形の湖を作りだした。この水は、嘉義～台南にひろがる嘉南平原15万ヘクタールを農地に変えた。雨季には洪水、乾季には干ばつで苦しむ不毛の大地を緑の大地に生まれ変わらせた恩を、地元の方々は忘れていない。彼の命日の5月8日は、今なお慰霊祭が盛大に行われている。

私たちが事前調査で嘉南農田水利会の徐さんへのインタビューをした際に、彼は八田與一をして「巨大な人」と表現した。そこにいた誰もがこの言葉に驚いた。「巨大な人 八田與一」教員の驚きをそのまま生徒に投げかけ、「何で巨大と呼ばれているのか・・・」を解き明かしていく学習を進めていくことにした。この経験を「台湾を誇りに思い・日本も誇りに思う」という彼らのアイデンティティを確立する機会にしたいと考えて取り組んでいった。

導入のビデオのインパクトは絶大だった。教師が正に体を張ってぶつかっていく姿は、生徒のやる気を大いに喚起させた。それぞれが「こんな方法で解き明かしたい・・・」という

案を出し、それを中学部教師5人が吟味しつつ、探求活動として実行していく道を探っていた。高雄タイム見学(校外学習)とタイアップさせて、生徒が企画したねらいにもとずき、生徒の案での探求学習・実地踏査をすることにした。それぞれが実現可能なプロジェクト案を持ち寄り、プレゼンしあい、最もよい案を遂行する方向で進んでいた。

プレゼンの結果を集計すると、大きく票を集めた活動が1つ浮き上がったが、その他の2つが「支持を集めていない票」をカバーするような結果になっていた。それまでの流れでいけば、最も支持を集めた案で全員が探求学習・実地踏査を行う予定だったが、その時の教員の協議でのS教諭の一言で、流れが変わった。

「これ、全部やりましょうよ。生徒たちが考えた案、全てやりましょう。」

5人の教師が3つのグループに分かれ、3つの活動を同時展開で実施することとなった。

以下は、活動に参加した生徒の感想である。この感想を読んだとき、心が震えた。私たちが望んでいた未来に出会った瞬間だった。探求すべき課題があるから本物の学習になる。生きていくうえでの必要な学びがそこにあることを体感する貴重な経験となった。

朝	八時十分に出発	の	は	朝	八時十分に出発	の	は	朝	八時十分に出発	の	は	朝	八時十分に出発	の	は	朝	八時十分に出発	の	は	朝	八時十分に出発	の	は
---	---------	---	---	---	---------	---	---	---	---------	---	---	---	---------	---	---	---	---------	---	---	---	---------	---	---

下見学



私たちが下見学に来たのは、朝の8時十分です。朝の8時十分に出発して、高雄の街を歩きました。最初は、高雄の街の風景が私たちにとても新鮮でした。そして、私たちの探求活動が、高雄の街の人々から多くのご協力をいただきました。これは、私たちの探求活動にとって、とても貴重な経験となりました。また、私たちの探求活動が、高雄の街の人々から多くのご協力をいただきました。これは、私たちの探求活動にとって、とても貴重な経験となりました。

台湾の出会い

右の本は、帰国直前にまとめあげた本「台湾の出会い」である。現地日本人会の広報誌「高雄プレス」に台湾で出会った方々との出会いについて寄稿していた文章をまとめたもの。各章は、既に書き上げたものだったので、それらをつなぐような編集作業を行って、仕上げていった。300冊くらい作成し、関係者にお渡しした。

この本のスタートは、八田與一。彼と出会ったことで「台湾理解の扉」が開かれていった。この本のキーマンは、蔡天賜さん。現地理解のための下見調査で伝統的な古い建物を見て回った際にお会いした方。東京の大学で学び、終戦後、台湾に戻り、大変な思いをして生き抜いてこられた豪傑で、その蔡さんが医者の方、林先生、李登輝総統とつながる楊さん、更には奇美実業の会長、許文龍さんをつないでくれた。帰国間際には、李登輝総統との面会の約束をるところまで行った。実際は、諸事情で叶わずに帰国したが・・・。

帰国後、全海研の活動で「ひらき・つなぎ・つむぐ」という合言葉に触れることになるが、当時はまだこの言葉を知る段階ではなかった。一つの出会いを大切にすると、管理職でない教諭という立場でも、人のつながりは物凄いところまで行くものだと思えた。この「台湾の出会い」は、私自身の思いが詰まった作品になっている。

拙書「フォルモサの祈り～台湾 高雄日本人学校の贈り物～」に大半は記載されている。ただ、全てを載せられたわけではない。第七章でも取り上げるが、もし、これをご覧いただいている出版関係者の方でお力添えをいただけるなら、再版したいとも考えている。

この活動の他にも、中国語の副読本づくりに協力したり、台湾の三大節句（端午節・中秋節・春節）を学ぶために、教員が役者になって中国語で演技してビデオを作ったりした。ビデオを作るために、現地でビデオカメラ、タイトラー、音響効果を入れるミキサーなどの機材を手に入れて編集作業を頑張った。副読本作りもビデオ作りも中国語の先生のお手伝いをさせていただいたまでだが、「念願がかなった」と手放して喜んでくださった。現地の生活を支えてくださった恩返しになり、その先生との繋がりは、私自身にとっても大きな支えになった。



児童生徒は中国語の時間に映像を見ながら現地理解を深めていった。「我、回来了！（ウォー ホエライラ！）」当時収録するために覚えたシーンを今も思い出す。エネルギー満タンの時代であったことは間違いなさそうである。

児童生徒は中国語の時間に映像を見ながら現地理解を深めていった。「我、回来了！（ウォー ホエライラ！）」当時収録するために覚えたシーンを今も思い出す。エネルギー満タンの時代であったことは間違いなさそうである。

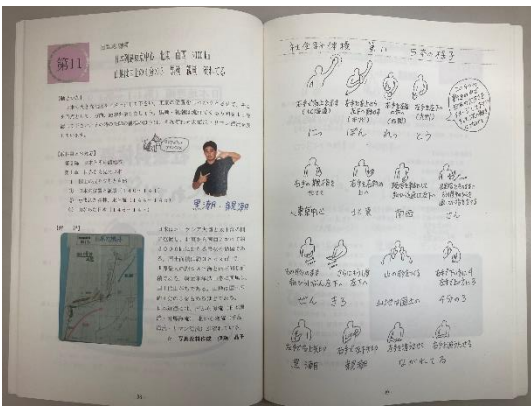


社会科三部作

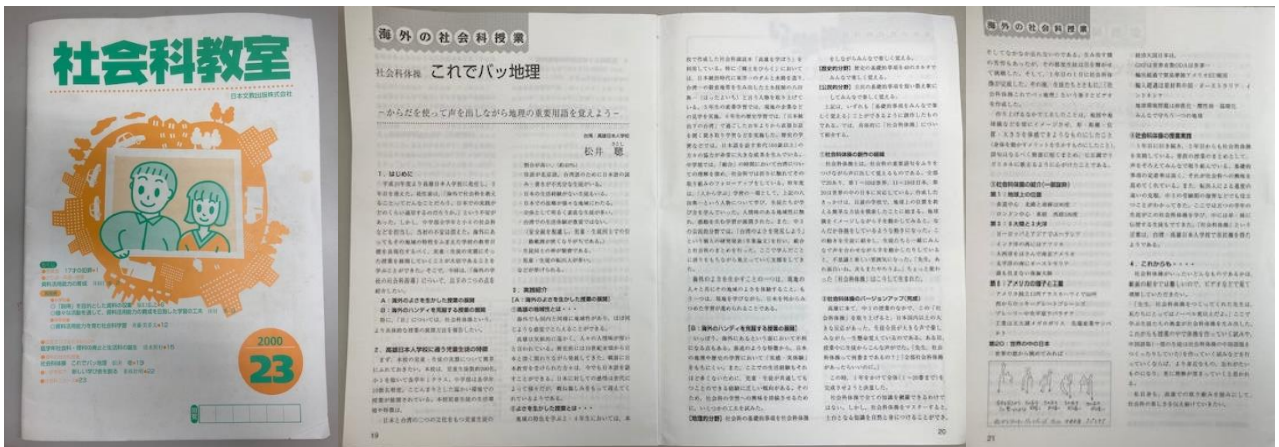
高雄日本人学校での生活で忘れてはならないことがもう一つある。それは、社会科学習を進めるための独自教材を開発したことである。日本にいと、業務(校務分掌など)や出張、研修、そして部活動に時間を割かれるが、ここはその割合が少なく、自分の裁量で時間を生み出すことができた。派遣前に「社会科教師として自主教材を地理・歴史・公民 各1つずつ作り出す」という目標をもっていただけを現実させた形になる。地理では、「社会科体操」、歴史は「いろはde歴史」、公民は「公民数え唄」となり、それを1冊の本にした「社会科三部作」なる本を自費出版した。(「台湾の出会い(前出)」の少し前に発行した。)

きっかけは、第四章で紹介した「社会科体操」だった。

中学部の社会科担当として中学部1~3年生の社会科と小学部6年生の社会科を担当したなかで、中1の地理的学習の中で「社会科体操」をやってみた。これが大ヒットで国内で作っていたものに加えて、新しく開発してレパートリーを増やしていった。結局、世界地理編1~10、日本地理編11~19、世界の中の日本編20 合計20の社会科体操が完成した。自分が担任していた生徒たち(中学部1年生)と一緒に「社会科体操 解説本」を作ってみた。当時まとめたものは、「社会科体操 これぞバツ地理」というタイトルでCDにも納めている。



左は、「社会科体操 第11」の部分である。左頁に語句と説明、右頁には、動きのイラストとし、見開きで表した。本にするという作業は、大変な時間を要する。間違いは必ずある・・・と疑って校正作業に臨んだのは、大変貴重な経験となった。ちなみに、平成12年度(派遣3年目)には、日本文教出版社の「社会科教室」という冊子の「海外の社会科授業」というコーナーで、この「社会科体操」を取り上げていただいた。以下は、該当部分である。



いろは de 歴史

この「社会科体操」のインパクトは、生徒たちにとっても相当なものだったらしく、中学部2年生になって歴史の学習を始める際に、ある生徒がこうやってきた。

「先生、歴史体操ないの？」

「あるわけないだろ……。じゃ、いろはのいの字で一万年前日本列島現れる！」

そのようなやり取りがあったと記憶している。この日から、歴史の重要用語を「いろはにほへと……」の順番に、古い順に詠んでいくというミッションを自分に課すこととなった。

まず、教科書（東京書籍）の中から、重要用語として扱われていることから、人物をピックアップした。その後、い・ろ・は……を書き出して、思いつく限り「歌」を試作してみた。たとえば「ら」。「楽市楽座で力をつける 織田信長は天下布武」と流れるように出てきた。織田信長が行った政策ととともに、力で天下統一を目指すという信長の生き方を歌に込めることができた。信長の次は、秀吉。「ら」の次は「む」。「む……」最初に「太閤秀吉兵農分離」という下の句ができた。悩んだ挙句に上の句は、「無一文から天下人」とした。「無一文」とはあまりにも失礼な一言で、様々な候補を考えてはみたが、思いつかなかった。ポイントとなったのは、「ゐ・ゑ・を」から始まる言葉だった。これには、古語をあてることとし、当時図書室にあった古語辞典を引いて言葉を探した。「ゐこん＝遺恨」「ゑそらごと＝絵空事」「をんな文字」を当てることにした。「平安京遷都」や「院政」など入れ込めなかったものも多少あったり、微妙なニュアンスの表現になってしまったところがあったものの、順番を整え、 $47 + 1 (ん) = 48$ の歌を作り終えた。2か月以上の月日を要していた。

授業では、出来上がったばかりの歌を順次紹介し、5つやったら「ミニテスト」を実施して知識の定着を図った。テストの達成度は良好で、その成果は旺文社の学力テストでも好成績をとることで「見える化」されていった。社会科体操のように体を動かすダイナミックさはなかったが、完成後に「かるた」を作成したことで、「いろは de 歴史」も相当インパクトのある教材に成長していった。生徒たちは、「渡来人 朝鮮半島からやってきた……」とか「連歌 能楽 茶の湯に水墨画……」など変わったリズムで詠む歌を繰り返したりしていた。こちらも周りに伝わる力はけっこう強く、楽しく学ぶ教材となった。

「かるた」の作成は、細部にこだわった。上と下を分けて遊ぶ「小倉百人一首」のようなスタイルにすること、裏面に関連用語や絵をつけることなど、「かるた」の仕様へのこだわりだけでなく、「遊び方説明書」という時代の名前のついた遊び方を創り出した。また、テーマソングも作成した。これらのこだわりは、「かるた」のクオリティを更に高めてくれた。教材が一過性のものでなく、今なお活用できるのは、この細部へのこだわりがあったからだと思っている。

「かるた」ができてからは、授業の隙間時間を利用して、折に触れてかるた遊びをした。「いろは de 歴史かるた大会」を何度も実施し、遊びながら楽しく学ぶというスタイルを続けていた。これは、帰国してからも同様だった。

ちなみに、この「いろは de 歴史」という教材は、前出の「社会科体操」と合わせて外務省が主催する「第1回 開発教育／国際理解教育コンクール」の教材部門での外務大臣賞(大賞)を受賞している。作った当時は、まさかこんな賞をいただけとは思っていなかった。今でも検索サイトに「いろは de 歴史」と入れると「【ODA】参加希望 開発教育／国際理解教育コンクール 作品検索 教材／かるた」で私の作品が最初に登場する。

作成当時から、また帰国してからも「かるたを先生が作るのではなく、児童生徒が作らなくちゃ・・・」という声は度々寄せられた。確かに一理ある。しかし、この場合は目的が異なる

と感じていた。とことん完成度にこだわったことが今につながっている。今、千葉大学で「いろは de 歴史」を活用して研究を進めているが、その当時のこだわりがなければ、その後のつながりも生まれなかったと思っている。

教材/かるた


いろはde歴史




(第一回作品)

松井 聡(市川市立 F 中学校/全海研)

関連資料

・いろはde歴史の説明資料 9枚 (PDF) 

参考

・研究論文 10枚 (PDF) 

カルタはこちら

(PDF) 

高雄(カオション)の太陽

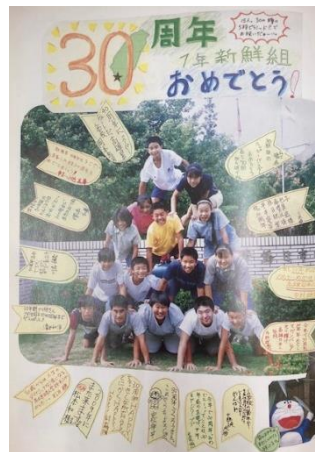
高雄日本人学校の3年間は、中1担任・中1担任・教務主任だった。もちろん、卒業生を出したいという願いはもっていたが、赴任される教師の年齢構成等によって役割は自ずと決まってくることは理解していた。私の場合は、中学部長の役回りではなく、3年目は小学部づきの教務主任となった。振り返れば、小学校の職員として働く初めての経験となり、学校全体の教務主任の仕事と合わせてその後のキャリアに生かせる貴重な経験となった。

クラス担任として学級通信を書いた。それまで手書きにこだわっていた自分が、高雄では「一太郎」というワープロソフトを使って作った。タイトルは「高雄の太陽」とした。今みると当時のことが蘇る。学級通信は、クラスの歴史そのものだった。

2年連続の中1担任。このクラスは、前年度に社会科を教えていた。この経験はめったにないことであろう。プラスの面を十分に感じながら、前出した「台湾のよさを発見しよう!」などの取組を進めていった。クラスは、14人。みんな個性の違うメンバーでありながら、まとまりのある仲間だった。地球温暖化について学び、行動が大事だと知った彼らは、エアコンを使うことに抵抗を示していた。暑い場合は、窓を開けて風を入れてしのごう・・・みんなが本気で行動していた。最も印象に残っているのが学習発表会である。学習発表会は、日本でいう文化祭のようなものだった。学年ごとに発表演目を考え、小学部1年生から中学部3年生までと一緒に鑑賞する全校行事だった。クラスで話し合いをした結果、物語を自作して劇をすることになった。生徒が考えた原案を担当の私がまとめる形で仕上げた。時間をかけて準備し、「飛べ、とんぼ玉」を演じきった。

「とんぼ玉」は、台湾原住民にとってお金のような役割をしていたり、世界各地で大事に扱われたりしてきたもの。見た目の美しさだけでなく、時空を超えて輝く魅力を持っていると感じていた。

生徒が作ったシナリオ・テーマソングを整えるのも担任が請け負った。テーマソングのタイトルは、「約束」だった。当時、ラテン語学習にはまっていた生徒が歌詞の一部にラテン語を入れ込んでくれた。みんなで作り上げた劇は、みんなの生きる力になっていると感じていた。このクラスを担当している時、創立30周年を迎えて、「記念誌」を作成した。右下は、その記念誌の写真である。30年後の2030年3月30日に再会することを約束した。あと5年半。集まろうと思っていた日本人学校の校舎は、移転している。



この年の卒業生（2つ上の学年）が、卒業の歌を作った。「心の友」という曲だった。歌詞を整えてほしいと依頼されたので、さびの部分に自分の想いを加えて曲もアレンジした。

♪ 忘れない 高雄 輝いた日々 忘れない みんな 優しい笑顔
明日への扉開き 歩き出す 果てしない夢に向かって・・・
どんな時もこの歌を 心の友に for my friend

手直した部分について、中学部教員（4人）に提示した。完成後にスタッフみんなでプロモーションビデオのような形で撮影したビデオが残っている。宝物である。

杏壇之光（シンタンチーグァン）

平成12年度末、高雄日本人学校（台湾）での勤務を終えて帰国する前に、同校の事務長さんから素敵な記念品をいただいた。今は、松井研究室の表札（背景）に活用している。

青空に泳ぐ鯉のぼりがまぶしいくらいの高雄日本人学校（当時）の正門で写したものである。撮影者は私。事務長さんが、記念品の台紙に私の写真を選んでくれたのだ。帰国する派遣教師には、一人一人に言葉が添えられていた。私の四字熟語は、「杏壇之光」と書かれていた。裏にはその意味も添えられていた。「まるで孔子の教えのように、その光は全ての教員の模範となって世界を照らす」当時まだ30代の一教諭である身としては、有難くも余りある誉め言葉に多少の戸惑いを覚えた記憶がある。

この事務長さんの予言が実現する。

10月17日。台湾で開かれる国際シンポジウムにおいて、「持続可能な教育における校長のリーダーシップ」というタイトルで基調講演をすることになった。台湾の教育部に招聘されて基調講演をする3人（日本・アメリカ・スウェーデン）の一人に選ばれてのことである。

まさに「杏壇之光」とも言える恩返し活動となる。もちろん、基調講演でもこの話を取り上げるつもりである。私自身が架け橋になる。派遣前の誓いを叶える時でもある。

